

葛藤から受容へ、「吃音を広げたい」



松木 佳奈子

<幼少期の葛藤>

小学校から中学校の間は、私がいままで一番吃音に悩み、ぶつかった時期です。幼稚園の頃から連発で、小学校に上がり授業中からかわれ始めてから、症状を抑えようと力を入れて、声を振り絞って、そこから難発に切り替わりました。吃音という言葉を知らず、なんとかこの喋りにくさを解消しようと足掻いた結果、報われることはありませんでした。クラスメイトや祖父、祖母に「なんでそんなももの」「落ち着いて喋れないの」と突っ込まれる日々。周りでどもりを受け入れてくれたのは母親だけでした。「おじいちゃんに育て方が悪いって言われたことがあった。佳奈の吃音のことで家族から孤立していたことがあった」と、最近になって当時私には見せなかった気持ちを伝えてくれます。

<吃音の認知と、その影響>

大事だと思うのが、「吃音の認知」についてです。母が就学時検診で先生に「娘はことばがつまるんです」と相談しても、小学校で保健室の先生に相談しても「成長過程ですので、様子を見ましょう」と。私がすぐに専門機関に行かなかったのもそれが原因と思っています。認知というのは、当事者に対してです。「何だかわからないけど喋りづらい、ことばが引っかかって苦しい、こんなの自分だけだから恥ずかしい」という気持ちは、毎日頭や体中に恐怖としてまとわりつき、できるわけがないのに、普通に喋らなきゃと思っていました。今は、小学生時代に身についた頭の回転のお陰で、瞬時に言い換えをしたり、あの、や、えーと、を話し始めにつけることで求めていた「普通」の喋り方を手に入れました。とはいっても、だめなときはだめで、根っこの部分はなにも変わっていません。演技が上手になっただけのことです。なにかも遅かったと思います。小学校のころにことばの教室やつどいのような場所に行けていたら…。認知の面でも生活場面での挑戦においても、とにかく吃音仲間での活動を内輪のものにしたくないのです。どんどん外に発信したいです。今わたしはバンド活動もしています。バンド活動は人前に出て自由に表現できることや、人間関係でも非常に多くの出会いがあり、とても楽しいです。相変わらず「普通という演技」は取れませんが、少しずつカミングアウトをしています。自分を出せなくて苦しんでいる子供たちに、「うまく喋れなくてもやりたいことがあれば怖がらず挑戦するべき。必ずそれが強みになる。」ということ、自分の経験を通して伝えたいです。



<支援者の皆様へ>

吃音は「口が音を乞う」と書きます。ですが、私たちも皆さんと同じように自分の口で伝えたいことが沢山、沢山あります。当たり前なのが難しい、小学生のこどもたちはこれから本当にたくさんの挑戦があります。様子を見るだけの先生が減り、葛藤に寄り添って、それぞれの強みを引き出せる先生が増えてほしいと心から願っています。どうか、よろしくお願ひ致します。

健常者になりたかった6年間



森崎 茜さん

はじめまして！森崎茜と申します。先天性の両耳感音性難聴(右 105 dB、左 95 dB)で、小学校以外は高知ろう学校に在籍していました。小学校での本籍は難聴学級ですが、朝の会から帰りの会までずっと交流学級で過ごし、放課後に難聴学級に寄ってから帰るとというのが1日の流れになっていました。なぜこういう形をとっていたかという点、『交流学級での学習は、それはそれで受けさせたかったから。なぜなら、小学校に入れた目的が同年齢の子どもの中で社会性を身につけさせるためだったから』だと母から聞いています。

私にとって難聴学級とは。プラス面としては①楽しい勉強ができる場所。クラスでやらないようなことを難聴学級の担任はたくさんやってくれました。②みんなより進んだ勉強ができる場所。クラスでの勉強はどれも簡単だったので、難聴学級の方で先取りした勉強を教えてくださいました。③しんどい時の逃げ場、休む場でもありました。そしてマイナスな面というのは、①担任が嫌いということ、②人と違うという現実を突きつけられるものであったことです。このどちらも障害受容ができていなかったがゆえのものではあるのですが、学級担任が隣にいることはとても恥ずかしいことで、特別扱いをされているのがとても嫌だったのです。でもいなかったら困るということも分かっていたのでかなり葛藤していました。

私の小学校時代の友人関係のトラブルについて。3人寄ればはじかれる。友達を束縛。障害に対する誤解。友人関係においては結構しんどかったのですが、今考えれば、早くに世間の目や自分の障害について身をもって知れたい機会だったなと思えます。教員としてどう支援をすればいいのかという視点から考えると、実際に教員ができることはあまりないかなと思います。ただただ、自分は味方だというメッセージを発すること、場面場面にに応じてその子のメンタルフォローをすることが大事なのかなと思います。子どもの逃げ場となると同時に、時々自分の障害と向き合わせるのも必要な支援だと思います。



さいごに。小学校6年間は、自分の障害と向き合わざるを得なくなる状況が多く発生し、障害があるという現実を突きつけられる最初の時期になると思います。特に人間関係においては、数々の葛藤を抱えるようになると思います。いろんな場面を経験していく中で、その場をしのぐためのスキルを身に着けるようになります。できているように見えてできていない、周りに合わせているだけのこともあるので、きちんとそこはどうなのかを見極めてほしいと思います。先生方だけはずっと子どもたちの味方でいてほしいです。その子の将来を見通して、逃げ場でもあり外へ一歩踏み出せる場でもある存在になって、粘り強く指導をしてほしいと思います。